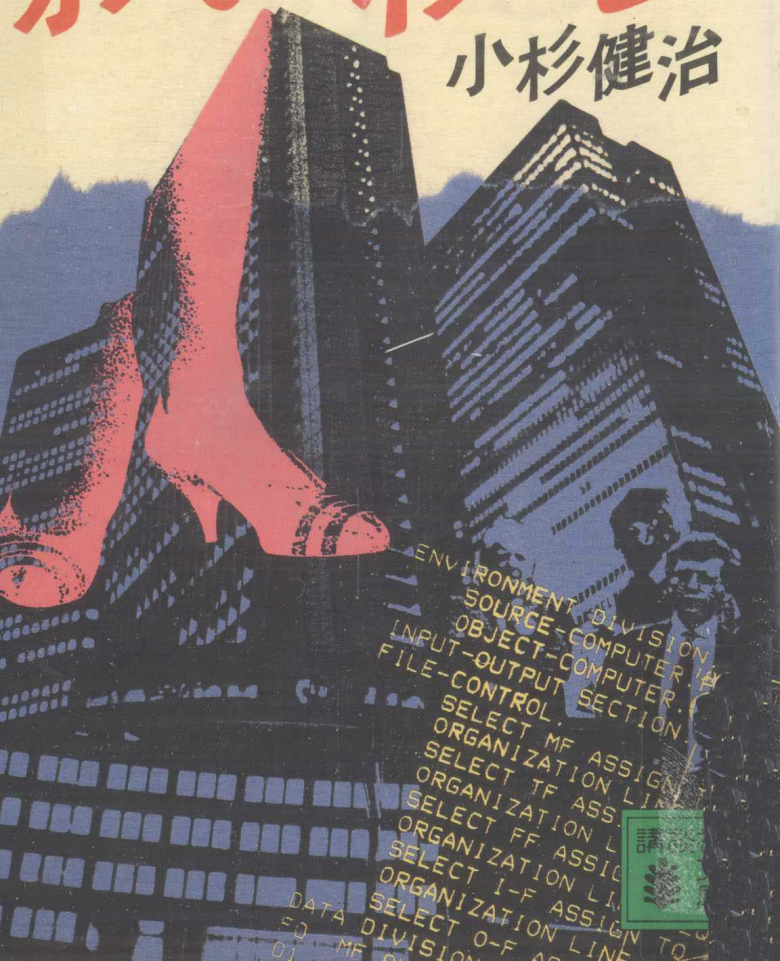


影の核心

小杉健治



ENVIRONMENT DIVISION
SOURCE-COMPUTER IN
OBJECT-COMPUTER
INPUT-OUTPUT SECTION
FILE-CONTROL SECTION

SELECT MF ASSIGN
ORGANIZATION LINE
SELECT TF ASS
ORGANIZATION L
SELECT FF ASSIC
ORGANIZATION LI
SELECT I-F ASSIGN
ORGANIZATION LINE
SELECT O-F AS
DATA DIVISION
FD MF



かげ　かくしん
影の核心

こ　すぎけん　じ
小杉健治

© Kenji Kosugi 1991

1991年4月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 編集部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——信毎書籍印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。(庫)

ISBN4-06-184881-X



社文庫

影の核心

小杉健治

講談社

目次

第一章 出向者 ————— 7

第二章 野良犬 ————— 66

第三章 関西なまりの男 ————— 137

第四章 もうひとりの脅迫者 ————— 198

第五章 サスペンド ————— 255

第六章 はぐれ鳥 ————— 307

第七章 核心への接近 ————— 384

第八章 そして、別れが…… ————— 433

解説 関口苑生 ————— 484

影の核心

第一章 出向者

1

ホテルのカーテンを開けると、ビルとビルの隙間からのろろ運転の車の列が見えた。まだ四月だというのに、きょうは真夏を思わすように気温が高い。

桂木^{かつらぎ}勲は今、赤坂の街を見下ろしている。上半身は裸であった。洋服を着ているときは、さほどわからないが、胸板は厚くがっしりしていた。

「今、何時？」

二十歳のはちきれそうな体を起こして、久子がきいた。その声で、桂木はやっと窓から離れた。テーブルの上の腕時計を持ってから、

「一時半になるところだ」

と、ベッドのほうを見て言った。桂木の声は低く響くような声だった。

桂木は女にもてるほうだった。背はそれほど高くないが、均整のとれた筋肉質の体つきで、濃い眉は目に接しており、高い鼻梁と赤みを帯びた唇が逆三角形の顔にほどよく配置されている。だが、女を夢中にさせるのは整った顔だちより、野心的な雰囲気ではないだろうか。

「会社に帰るのめんどくさくなっちゃったな」

久子はそう言つて、またベッドに倒れ込んだ。久子は半年前に桂木と同じ大同システムに入社した。一時期、ホテルをしていたらしく、そんなことも平気で口に出す女だった。

「起きてシャワーでも浴びてこいよ」

桂木はそう言つてたばこをくわえた。そろそろ会社に帰らなければならない。ホテルのマッチで火をつけてから、テレビのスイッチを入れた。

桂木が平日の午後、そつと職場を抜け出し、このホテルで過ごすのはきょうで四回目であった。もちろん、ひとりでホテルの部屋をとるほど無粋ではない。

椅子に腰を降ろし、思い切り煙を吐いた。職場では、皆一生懸命に仕事をしているだろう。いや、仕事に精を出している振りをしているに違いない。だから会社にいるより、ぱつと遊んで気分転換したほうがいい仕事ができる。特に、システムエンジニアは緻密性のほかに独創性が必要なのだ。規則にしばられて、どこからいい発想が生まれるものか。しかし、この考えが言い訳に過ぎないことも、桂木は知っていた。平日の昼間に職場を抜け出し情事をむさぼることで、心の中をふと通り過ぎていくすきま風のような虚しさを忘れようとしているのだ。

浴室からシャワーの音が聞こえてきた。いつの間にか、久子はベッドから起きて浴室に行ったようだった。

吸い込んだたばこの煙が、腸はらわたに染み入るようだ。情事のあとのけだるさがじつくり襲つてきた。久子は小遣いをやれば、あとくされがない女であった。妻との生活がうまくいっていない桂

木だが、久子に対して愛情といえるものは感じていない。単なる欲望から彼女を抱くだけであった。久子がどんなつもりで相手をしているのかはわからない。あるいは、ホテル時代の習性が抜けないのかもしれない。

桂木の目は、音量を絞ったテレビの画面に当てられていた。

そのとき、くわえたたばこが口から落ちそうになった。画面に、西和銀行本店が映し出されたからだ。なにやら、大勢の人間が映っている。現金自動支払機コーナーに人があふれていた。行員らしい男がしきりに叫んでいる。

あわてて立ち上がって、テレビの音量を上げた。

「——なお、窓口にてサービスを続けておりますが、一時間近く経った現在もまだ故障の原因が見つからず、もうしばらく、オンラインの使用は不可能と……」

アナウンサーの声が脳天を響かせて耳にとび込んできた。桂木の裸の体に鳥肌が立った。久子がバスタオルをまとってそばに来たのも気づかなかった。

「あら、西和銀行じゃない！」

久子の声は耳に入らなかった。桂木は、あわてて部屋の隅に行って、受話器をつかんだ。西和銀行事務センターに電話をかけた。

きょうから、西和銀行のコンピュータに、ファームバンキングの実験システムが加わって稼働を開始したのである。主要企業十社に設置されたパソコンと銀行のコンピュータを結び、企業からパソコンを使って銀行取引を可能にするソフトウェアである。

交換が出ると、早口で、オンライン班の木戸を呼んだ。木戸は西和コンピュータサービスの通称SEと呼ばれるシステムエンジニアである。

西和銀行の第三次オンラインは他行から大幅に遅れて開始した。スタートが遅れた理由は、頭取人事をめぐる内紛の影響であった。第三次オンライン推進派であった専務の失脚がスタートを遅らせたのである。

西和銀行のコンピュータ部門は、西和銀行が出資して作った西和コンピュータサービスというソフト会社によって運営されているが、第三次オンライン開発には百数十名のSE、プログラマーが必要であった。そのため、自社のソフト会社だけでは賄いきれず、数社の外注ソフト会社から要員の派遣をさせている。

桂木の会社もその外注ソフト会社の一つだった。

第三次オンライン開発プロジェクトは業務別に幾つかのチームに分かれており、桂木はファームバンキングなどのシステム開発を担当するチームリーダーであった。これは異例なことであった。リーダーは西和コンピュータサービスの人間になるのがふつうで、外注の人間がリーダーになることはまずない。それだけ、桂木のSEとしての評価が高いということだ。

桂木は受話器を耳にあてがったまま待った。おそらく木戸はコンピュータ室に行っているのだろう。桂木はじりじりしていた。女を抱いた余韻は、とうに吹き飛んでいた。

目の端に、裸の久子の姿が見えた。桂木は久子に向かって、

「早く、洋服を着ろ！」

と、乱暴に言った。そのとき、受話器から声が聞こえた。

「もしもし、木戸です」

「桂木だ。システムダウンか？」

「あつ、桂木さん。どこに行っていたんですか。探していたんです」

木戸の声は、こんな状況には似合わない間のびした声だった。

「そんなことより、どうなんだ。原因はわかったのか？」

桂木は自分より年長の木戸に対していらだったように言った。

「バンクのようなんです。一度に利用者が殺到して、バッファがフルになっています」

バッファとはコンピュータの中のデータを蓄える場所である。利用者が殺到し、データを蓄える場所が不足してしまったのだ。桂木はきょうが二十五日であることを思い出した。給料日の会社が多く、昼休みの時間帯に利用者が集中したのである。それだけならまだよかったが、ファームバンキングの実験ソフトウェアの稼動開始と重なったのである。そのために、コンピュータの能力が追いつかなくなってしまったのだ。

「見通しは？」

「調べています。まだ、わかりません」

桂木は舌打ちした。

「すぐ、来てください。こっちはてんでこまいです」

桂木は急いで洋服を着て、部屋を飛び出した。

「ねえ、おこづかいは？」

「それどころじゃない」

桂木は怒鳴った。

「君は、これからまっすぐに本社に帰れ！ きょうのことは誰にもしやべるなよ」

久子は、日比谷にある大同システムの本社から、給料の明細書を届けに、四谷にある西和銀行事務センターまでやって来たのである。出向していると、ほとんど本社に帰ることはない。毎月の給料は銀行振込であり、交通費や残業代の請求などの事務手続には必要の都度、久子が本社からやってくる。事務処理を済ませて本社に帰るとき、久子と桂木は暗黙の了解のように銀行を抜け出したのである。

ホテルは別々に出た。急いではいても、桂木は周囲に気を配ることは忘れなかった。表通りには、サラリーマンやOLらがのんびり歩いていた。何か無性に腹が立った。

タクシーをつかまえて四谷にある事務センターに急いだ。道路は混んでいた。

「きょうは給料日ですからね」

信号待ちのとき、運転手がうんざりしたように言った。

事務センターに到着したのは、二時過ぎであった。玄関の前に、テレビ局や新聞社の車が駐車していた。

報道陣でごったがえす入口を避け、裏口から建物に入った。階段をかけあがり、三階にあるコンピュータ室に向かった。

廊下に、メーカーのSEの姿があった。オンラインはまだストップしたままだった。大同システムの本社から、桂木の直属の上司である拝島部長もかけつけていた。

拝島が桂木を見て何か言いたそうだった。桂木は無視してコンピュータ室の中に入った。コンピュータ室では数人がうろろしていた。桂木の姿を見て、長身の木戸がかけ寄ってきた。桂木は、木戸の説明をききながらコンピュータのシステム監視席に向かった。

監視席に着くと、桂木はコンソールにアウトプットされたメッセージを見た。やはり、木戸の言うとおり、コンピュータのメモリー不足の公算が強かった。いちどきに、利用者が殺到したため、コンピュータの処理能力を越えて、オンラインシステムの動きがとれなくなってしまったのだ。当然、システム設計では対処を講じてあった。だが、結果から考えると、その対処法が甘かったことになる。

桂木は応急処置として、ファームバンキングの実験システムを切り離し、預金・融資・為替などの総合オンラインサービスだけにして、なんとかコンピュータを稼動させた。

結局、オンラインが復旧したのは二時半であった。二時間の中断ということになる。

「すぐ、実験システムを外して、オンラインだけ再開させればよかったのだ！」

桂木は木戸に怒鳴った。桂木にしてみれば、この程度の対応がわからないことがなげなかつた。ファームバンキングの実験システムが影響しているなら、それを切り離し、総合オンラインだけを再開させ、その間に実験システムのほうの対処を考えればよかったではないか。そうすれば、実験システムは止まっても、オンラインのストップは僅かな時間で済んだはずである。

「しかし、実験システムだって止めるわけにはいかなかったんですよ。いくら、ファームバンクの対象が十社程度だといっても、銀行にとっちゃ主要な十社なんです」

木戸がむっとしたように言った。木戸は東工大出身の秀才で、桂木より二つ上だった。西和コンピュータサービスのエリートである。

「桂木さん、ちょっとお話があるんですが」

木戸が胸を突き出すようにして言った。

「わかった。じゃあ、会議室に行こう」

桂木が会議室に入ろうとしたとき、

「桂木さん」

と、声をかけられた。ふり向くと顔面蒼白になっている若い男が立っていた。下請ソフト会社から派遣されている若手のプログラマーだった。

「ぼくのプログラムミスでしょうか？」

彼は泣きそうな顔できいた。たいへんな事態になって、彼もうろたえているのだ。

「いや、君のせいじゃないよ。設計ミスだ」

日頃から、自分と同じ出向者に対して同情する気持が桂木にあった。この男も今はいいが、いずれ学歴の壁にぶち当たることだろう。安心したように去って行く若い男を見送ってから、桂木は会議室に入った。

桂木は会議机をはさんで木戸と向かい合った。

「彼らクラスでは自分でプログラムを作っていながら気がつかないんですね」

木戸が今の若いプログラマーをばかにしたように言った。

「彼にそこまで要求するのは無理だ。君が気づくべきだったのだ」

桂木は木戸を責めたが、木戸は動じたふうもなく口を開いた。

「それより、桂木さん、いったいどこに行っていたんですか？」

「本社の用でちょっと出ていたんだ」

桂木の返答には、少し間があった。

「そうですか。でも、外出するのなら、私に報告してくれないと困るんですがねえ」

木戸はこのことを言いたいために、桂木を会議室に連れて来たようだった。

「俺は大同システムの人間だ。君にいちいち許可を得る必要はない」

「でも、大同さんの社員でも、われわれの会社の管理下で仕事をしているはずでしょう」

「俺は技術を売っている。身や心まで売ってはいない」

「しかし、うちは銀行からプロジェクトの運営をすべて任されているんです。西和コンピュータサービスの規則には従ってもらわないと……」

「言っておくがね。俺は出向だとは思っていない。ただ仕事の間を銀行にしているだけだ」

「そんな考えは通用しませんよ」

「どうしてだ」

「だって、そうでしょう？ 他の派遣会社の人だって皆、われわれの会社の規則に従って仕事を